

6. ステロイド性骨粗鬆症に対する薬物療法

Drug therapy for glucocorticoid-induced osteoporosis

宗圓 聰

Satoshi Soen(教授) / 近畿大学医学部奈良病院整形外科・リウマチ科

key words

グルココルチコイド
骨粗鬆症
ガイドライン
薬物治療

わが国の2014年版のステロイド性骨粗鬆症の管理と治療ガイドラインでは、ステロイド性骨粗鬆症に対する無作為化比較対照試験ならびにそのメタ解析の結果に基づいて骨密度増加、椎体骨折抑制効果、さらには一次および二次予防効果の有無について検討し、第一選択薬がアレンドロネート、リセドロネート、代替え治療薬が遺伝子組換えテリパラチド、イバンドロネート、アルファカルシドール、カルシトリオール、とされた。

はじめに

ステロイド性骨粗鬆症の歴史を表1に示す。初めて米国リウマチ学会(American College of Rheumatology: ACR)よりステロイド性骨粗鬆症の予防と治療に関する勧告が発表された時点では、ステロイド性骨粗鬆症に対する薬剤の臨床試験は行われておらず、ホルモン補充療法が推奨されていた。その後、英国、カナダからガイドラインが提唱されると同時に経口ビスホスホネート製剤の臨床試験結果が発表された。さらに、ACRと英国の改訂、オーストラリアからの発表があり、ビタミンK₂の臨床効果と活性型ビタミンD₃のメタ解析の結果が発表された後に、わが国初のステロイド性骨粗鬆

症の管理と治療ガイドラインが発表されている。そして、世界保健機構(World Health Organization: WHO)による個々の患者の10年間の絶対骨折危険率を判定するツールであるFRAX[®]の発表やテリパラチド、ゾレドロン酸のhead to head試験の結果が発表され、2010年にACRの改訂勧告が発表された。2012年には国際骨粗鬆症財団(International Osteoporosis Foundation: IOF)とECTS(European Calcified Tissue Society)によるステロイド性骨粗鬆症のガイドライン作成のための枠組みが示され、2013年には英国のNOGG(National Osteoporosis Guideline Group)による骨粗鬆症の予防と治療ガイドラインが発表され、ステロイド性骨粗鬆症に関する記載も

なされている。そして、2014年にわが国のステロイド性骨粗鬆症の管理と治療ガイドラインが改訂された。その後、2017年にACRの最新の改訂勧告が発表され、2018年にはデノスマブのhead to head試験の結果が発表された。

本稿では、2014年版ガイドラインの記載を中心に、薬剤の有効性と推奨について述べるとともに、次の改訂に向けた展望についても述べる。

ステロイド性骨粗鬆症の管理と治療(図1)¹⁾

経口ステロイドを3ヵ月以上使用中あるいは使用予定の患者については一般的指導を行った上で危険因子の評価を行い、スコアが3点以上の場合には薬物